広島大学教育学講座のあゆみ 2

― 河野和清教授の語りから ―

河　野　和　清
（聞き手：古賀一博・山田浩之・鈴木理恵）

本稿は2016年３月に退職された河野和清教授のインタビューをまとめたものである。退職の準備でお忙しい最中の2016年３月18日に河野先生の研究室におうかがいし，約２時間のインタビューを行った。

近年，多くの学会などで会員の聞き取り調査が実施されている。広島大学教育学講座でも2014年３月に退職された大塚豊教授にインタビューを実施し,「広島大学教育学講座のあゆみ」（『教育科学』第30号）としてまとめている。本稿はその第２回にあたるものであり，河野先生の語りから教育学講座の歴史を描き出したい。

なお，文中の言葉使いや会話の内容など，内容を変えない範囲で読みやすいように編集している。

山田浩之（以下Ｙ）：大学に入学された時のことから現在までずっとお話を伺えたらと思うのですが, まずは, 大学進学についてお話を伺えますでしょうか。先生は高知大学の教育学部ですが，どうして教育学部だったんでしょうか？

河野和清教授（以下Ｋ）：あの，教育には，もともと，漠然とですが，関心はありましたね。中学時代に，尊敬する社会の先生がいらして，その影響もあったかもわかりません。教師になってみたいという, 気持ちはあったと思います。それで，教育学部を選んだと思います。

Ｙ：その時はもう，教師になるという，明確な目標のようなものがあったんでしょうか？

Ｋ：どうだろう？　明確に決めたのは高校時代かな？　教師も良いなという漠然とした思いは，もう中学校時代にありましたからね。

Ｙ：えっと，教育学部ですが，中学校の先生とか，小学校の先生になりたい，というふうに思われたのですか？

Ｋ：とくになかったですね。記憶は定かではないですが，おそらく，小学校か，中学校の先生くらいのことを考えていたんじゃないかと思います。

Ｙ：で，高知大の教育学部というのは，どんな雰囲気？

Ｋ：（笑）あのー，７，８年前に中国四国教育学会がありましたよね，あのとき，えーと，いつでしたかねぇ，７，８年，それ以上前かもしれませんね。その時には，古い校舎だなぁと思って見てたんですけどね。私が大学に通った頃は，

新しい校舎だったですよ。新しく，そして，非常に明るかった。ま，南国土佐ですから，日差しも強く，まあ，校舎全体が明るく感じられ，活気もありました。で，イメージとして，自由闊達な雰囲気というものがありましたね。だからか，大学時代は，よく遊びました（笑）。

鈴木理恵（以下Ｓ）：それは海に出て？

Ｋ：あの，水泳，海などに出て泳ぎましたね…太平洋に面した砂浜，須崎の辺りとか，それから，もちろん大学構内のプールでもよく泳ぎましたけどね。それから魚釣り，磯釣りですよね。高知は，私にとって第二の故郷くらいに思っていましたけどね。卒業後も，高知のことが夢に何度も出ましたからね。ま，それくらい好きだったのでしょうか。

Ｙ：あの，高知大の先生方との関係はいかがだったんでしょうか。

Ｋ：私の恩師は，岡本一平先生でして，東大出身の方で，ご専門は教育学でしたね。その先生の指導を受けました。お家にも時々お邪魔しました。大学院受験の時に，広大を受けたらどうかというアドバイスをいただきました。岡本先生は広大の先生をご存じでしたので。

Ｙ：さきほど，遊ばれたと言われましたけど，ほかの同級生，あるいは先輩とかの関係というのは，その，一緒に遊ばれたとか…

Ｋ：同級生は，ほとんどが，小学校，中学校の先生になりましたけどね。お互いの下宿を行き来していました。今でも年賀状のやりとりはしてます。

Ｓ：そのときには，賄い付きの下宿のようなところに住んでいらしたんですか。

Ｋ：いや，下宿では自分で作っていました。

Ｓ：へぇぇぇ。

Ｋ：でも，みんなどうだろう，あの頃は，ずっと自分で作ってなかったかな。少なくとも，周りの友達はけっこう自分で作っていたと思いますよ。時たま学食を利用しましたけどね。僕は朝倉中学校の裏手あたりの，古びた家に住んでいました。東屋みたいなところでしたね。

Ｓ：じゃあ釣られた魚も，ご自身で調理されたり？

Ｋ：(笑)つくりましたね。魚をさばくのは小さい頃からやっていました。でも，その頃はそんなにたいした料理はしてないですよ。むしろ，院生時代には，下手ながらも，作りましたけどね。

Ｙ：学部時代に，印象に残っていることってありますか？
Ｋ：一つ，そうですよねぇ，授業で言えば，あの頃，なんですかね，経済学と言ったら，マルクス経済学ですよね。だから，一般教養や専門で，マル経のＦ先生とか，Ｋ先生の授業をとりました。当時，高知大ではマルクス経済学が幅を利かせていたように思います。学生運動も活発でしたがね。でもあの過激な運動にはついていけなかった。冷めてみていました。ただ，一つだけ，近代経済学の授業を受けましたけどね。マル経の授業はいずれも試験が厳しかったですけど，興味をもってしっかり受けました。理論的には面白いよねと思って聴いてました。成績は結構よかったです。かなり難しい授業だったんですけどね。でも，もう授業の内容を忘れちゃいました。ときどき，当時使った教科書があれば，読み返してみたいな，と思うことがあります。

思い出といえばもう一つ。昼休みの時間に大学のプールで泳いでいて，午後の授業に少し遅れてしまい，教室に入ろうとしたんですが，その教室は２階にあり，前側のドアから入れる造りなっていたのですね。しかも，その授業は数学がご専門のＩ先生で，とても厳しく，神経質な先生だったんです。で，入ろうかどうしょうかと迷っていたんですけど，まぁ入ろうと決心して。入るには，前のドアは締めてあるし，じゃー，できるだけ後ろから入ろうと思って（笑）。２階の建物の外側に幅50センチ程度の出っ張りがあり，そこを伝って教室の後ろまで移動し，教室の後ろ側の窓から入ったんです。そうしたら，もの凄く怒られました。「おまえはだれだ！」って（笑）。で，名前と，それから学生番号を言えって，学生番号は，その当時44年度生ですから，44の4444だったんです。それで「オール４です」って答えたら，学生がワァーって爆笑して（笑）。さらに先生からこっぴどく叱られました。そんなこともありましたね。今から思えば，ばかなことを…，反省です。

こんなことも。海に磯釣りに行った時に，年配のおじさんも魚釣りをしていて，どんな獲物が釣れたのかなと思って，「何が釣れましたか」って聞いたら，教育学部の体育の先生でした（笑）。それで，びくの中を見せながら，「ブルータスおまえもか」って（笑）。今だったらたいへんなことですけど，そんな時代だったんですね。
Ｓ：魚釣りというのはいついらっしゃったのですか？土日？　あ，土曜は休み

じゃなかったですよね，日曜日に？
K：私ですか？　それは普通の日，授業が終わってからとか，授業の合間とか，だって学生ですから。もちろん土日も。
S：自転車ですか？それともお車，持ってらっしゃらないですよね。
K：車は，えっと，途中から持ちましたよ。
S：へぇぇぇ？
K：ほとんど自転車です。学生生活の後半あたりで車を持ちましたね。あっ，車といえば，自動車学校の先生もしました（笑）。えっと２，３年生頃からだったかな。
S：アルバイトで？
K：アルバイトです。当時はできたんですよね。今はやらんと思いますけどね。報酬が良くて，ずっとやりました。面白かったですね。
S：かなり珍しいんじゃないですか。当時，学生で車を持ってらっしゃるって。そうでもないんですか？
K：もちろん，安い車ですよね。まぁ多くはなかったけど，バイトで貯めて持つ学生も周りに何人かいましたよね。
Y：話は変わりますけど，学生運動の雰囲気というのはどんな感じだったんですか。
K：かなり厳しかったですよね。授業やってたら，過激学生が教室の中に乱入してきたこともありましたね。それから，大学の正面玄関で，警官隊と小競り合いになるとか，あるいは僕の友達は，「今日は狙われているんだ」と言って，授業中教室に駆け込んできたこともありましたよ。学生同士のあつれきもありました，乱闘というか。だから，当時，ごくまれに不穏な空気が流れることもありました。
Y：先生ご自身は学生運動には？
K：僕はノンポリ学生。
Y：デモに行かれたりとかは？
K：デモには１，２回は行ったかもしれないけど，ほとんど傍観者でしたね。なぜかというと，あまり過激な行動に共感できなかったから。これは自分の性格もあるでしょうけれども，あまりにも，ものを壊してなにが生まれるの，と

いう疑念，まあ不信感がありましたよね。彼らはいいことは言うんだけども，実際にとっている行動をみるとき，いかがかなっていう，思いもありました。
Ｙ：それで，大学院に進学を決められたというのは，いつごろ，どのような理由で？
Ｋ：理由ね（笑）。本音を言えば，どちらが本音かな？　一つは，さっき言ったように，教師になるつもりだったんです。で，採用試験も受けましたしね。当時の採用試験は，今と違って易しくて，それこそ男であれば通るというぐらいの状況だったですね。僕も合格していましたが，このまま教師になってもいいけど，やっぱり，核になるものがほしかった。十分に勉強もしてないし，教師になって，どういうふうに教育を見るのか，自信もなかったですしね。教育をみる眼というか，エデュケーショナルマインドというか，そういうものがほしかったですね。就職はそれができてからでもいいかなと。それから，もう一つは，不純な理由ですけど，先ほど言ったように，大学って，非常に自由な雰囲気の中で気ままに生活できますよね。この，生活をもう少し延長したいなぁ（笑）という願望も半分ありましたよね。留年するって言ったら親が許してくれないけれども，院に行きたいと言えば，なんとか説得できるかなぁという気持ちもありました。どちらが本音かな？
Ｙ：では，進学というのを考えはじめられたのはいつごろだったんですか。
Ｋ：やっぱり４年生くらいじゃないかなぁ。
Ｙ：採用試験が終わってからなんですかね。
Ｋ：いやぁ…どうだろう…前かもわからない。採用試験が終わってからということはないですね，その前からだと思います。３年の後半くらいかもわかりませんよね。
Ｓ：じゃ，大学院にいらっしゃる時には，将来的には教師になるけど，その前に，ちょっと時間的に，もうちょっと遊びたいし，もうちょっと学びたいっていうふうなことで，とくに研究者を目指していたというわけでは…
Ｋ：ないですね，だからマスター２年を過ぎたら，すぐ出るつもりで，もう最初からそういう気持ちでいましたね。親も許さないだろうし…
Ｙ：今ならば，大学院，進学は英語だけですけど，当時は２カ国語，第２外国語もありましたよね。それプラス教育学の勉強もしないといけない。大学院入

試もそんなに簡単ではなかったんじゃないかと思いますが。
K：まったくそうです。経歴を見ていただければわかるように，研究生を１年やっています。
Y：あ，なるほど，この１年間は研究生。
K：それはもう全然レベルが違います。教育学も，もちろん高知大の授業ではやりましたよ。やりましたけど，あまり記憶にないものね。簡単な統計学はやりました。少し憶えています。教育の問題を，相関をとる程度の，簡単な統計的処理するのがありました。それから，Ｆ先生の教育史やM先生の教育財政の授業も受けていますが，内容は憶えていません。どちらも革新系の先生だったですよね。当時，一部の革新系の先生は，学生と一緒に，警察隊と対峙していましたね。あまり授業には関心を持てなかったのかなぁ。学期末試験のための勉強はしたんだろうと思いますけど，あまり記憶にないですよね。卒論も，こちらの学生さんはきっちりトレーニングされますよね。僕の場合，論文の書き方についてあまり指導を受けていないですよね。
Y：研究生１年やるというのも，かなりそれなりの決意がないと，と思うんですけど。
K：うぅーん，決意というか，これを我慢すれば，自由な雰囲気を満喫できるし，教師になるための勉強もできるという期待感があったかもわかりませんね。
Y：研究生の間はどんな勉強を。
K：皇先生の西洋教育通史とか，英語やドイツ語の語学とか，過去問ですよね。
Y：広大に来られると決めた理由は何かあるんでしょうか。
K：ひとつは，まあ地元だということもありましたし，それからなんていうか，実証的な研究スタイルをとる，というのがあったと思いますね。それから恩師に勧められたというのも，大きな動機かもわかりませんね。
Y：さきほど，岡本先生が勧められたというふうに言われたんですけど，岡本先生はどうして広大をと言われたんですか？
K：それはわからんですけど，僕が広島県出身だから，地元がいいんじゃないの？ということですかね，それから思考方法が革新的？じゃないよね（笑），というのがあったかもしれません。また，岡本先生は広大の先生をよくご存じだったようですしね。

Ｙ：で，そのなかで，教育行政学を選択された理由というのは？
Ｋ：もともと社会科学系の学問領域が好きでしたから，卒論の時に教育委員会制度の研究をしたんですよね。その延長線上で考えたと思います。岡本先生が，ま，結局，広大の教育行政といったら名和先生というので，紹介していただいたと思います。
Ｓ：ちょっと話が戻るんですけど，卒論で教育委員会の制度を研究されたというのは，どうして，このテーマを選ばれたんですか？
Ｋ：なんでだろう（笑）。もともと，行政学や政治学など社会科学系の学問が好きだったんですね。だから教育問題で，教育に関わる行政的な領域と言ったら，教育行政というのがありますよね。で，教育行政の問題ということになると，教育委員会制度っていうのがある。そうすると，教育委員会制度っていうのはどういう仕組みになっているのかな，というのがそもそもの卒論の問題意識だったんではないかと思いますね。最終講義の時にもお話しましたけど，当時，木田宏先生や天城勲先生などの書物をよく読みました。それらを中心にして卒論をまとめたと思います。法制度的にどういう仕組みになっているのか，そこにどういう課題があるのか，というようなことをまとめたと思います。でも，その時に，これは今でも憶えているんですけども，法制度的に見て，それはそれでいいんだろうけども，もうちょっとダイナミックに見る方法はないかなぁと思ったことがありますね。で，その時に，組織科学とか，教育組織論というものがあればいいよね，というのを，卒論のあとがきで書いたのを憶えています。その当時，組織科学とか，あるいは教育組織論とか，組織そのものを研究する学問領域のあることを知らなかったんですけどね。
Ｙ：大学院に入られて，大学院の雰囲気っていうのは，当時どんな感じだったんですかね。
Ｋ：当時は，研究室内も，それから，同僚間も雰囲気はよかったですよね。研究室内で，特研の後で，先輩，後輩，よくみんなで飲みに行ったりしました。それから当時は，自分たちで，学習会なんかも開いたりしてました。
Ｙ：行政を専攻する院生というのは当時何人くらいおられたんですか。
Ｋ：私が入った頃には，どうだったかな。５～６人，多い時で，７～８人いたかもわからないですね。ところが，２年で就職しようと思っていたんですけど，

先輩たちが就職されて，だんだんと少なくなってきた。最後は，僕より一つ上のＦさんも公務員になられましたし，同期の方も，福岡の県庁に入られたし，あれよ，あれよと言う間に，先輩たちがほとんどいなくなっちゃったんですよね。名和先生から,「おまえ残らんのか？上に行かんのか？」って言われました。僕はだいたい行く気はなかったですね。当時，修士論文にはとても苦労しましたし，レベルが違い過ぎましたからね。本当に，最初の１年ちょっとは，充電するのに精一杯でした。でも，しんどいですが，少しずつ面白さも感ずるようになりましたね。修士論文が進むにつれて，心のなかに，もうちょっと続けてみたいよね，という気持ちが出てきましたよね。でもまあ，親から「いつまで行くんか」とよく言われましたしね。２年が潮時かなあと思っていました。そんな時に，名和先生から，上にあがらのんか？の，誘いともとれぬ一声があり，心が動いたんでしょうね。で，まあ，出るのはいつでも出られるわい，と思って，進学を決めたと思います。

Ｓ：その時は，ま，研究は続けたいけれども，将来的に研究者になる，大学の教員になるというふうな展望というか。

Ｋ：僕はあまりなかったですね。というのは，高知大学の学生時代を振り返ると，大学の先生を見て，この職業ってどこが面白いのかなって思っていた(笑)。今でも思い起こすんだけども，大学構内に官舎があったんです。そこから年老いた先生が，いつも，古い，ボロボロの自転車を漕いで，構内を走っていらっしゃったんですよね，でも，そういう生活ってどこがいいんだろうねぇ，と思っていた。それから，老先生が路面電車に乗る時に，思索にふけっておられたのか，料金の代わりに，ハンカチを入れようとされたりね。そういう浮き世離れした生活よりも，サラリーマンとか，他の職業の方がもっと楽しいだろうね，という思いはありましたね。当時，外見からしか観ていなかったんですね。

Ｙ：大学教員を意識されるようになったのはいつ頃なんですか？

Ｋ：ドクターに入ってすぐだろう思います。さすがにドクターに入ると覚悟を決めました。ドクターに入って，Ｄ２まで行って，Ｄ３のとき助手になりましたからね。だから，いつの間にか，この道に入ってしまったという感じですね。でも，自分の研究に少し面白味を感じていた。僕の研究は，経営学的な色彩が強く，まぁ，教育行政の組織論的研究で，行政のオーソドックスな研究からは

ちょっと外れていたんですけどね。でも，名和先生には自由にやらせてもらって，これはありがたかったですね。

Y：研究テーマ，その，行政の組織論的研究を決められたのは，いつごろからですか。先ほど，卒論の最後の方でとか…

K：修士課程に入ってからです。修士論文を書くので，テーマを選ばなければならない。で，名和先生の研究室はアメリカが中心でしたから，自ずとアメリカの教育行政に目が向きました。そうすると，アメリカの教育行政にはどんな研究があるのかを見ていったら，あの，組織論的な研究というのがあったんですね。具体的には，M. B. マイルズという研究者なんかもそうなんですけどもね。あ，これは自分がやりたい内容と一致しているよね，ということで，これらの研究者の文献を中心に収集していったということです。まあ，当時は，組織論的な研究ですから，一般経営学や心理学や社会心理学の本もよく読んでいました。

Y：そのころ読まれていたのは，やっぱり洋書が中心という感じですか？

K：和書と，もちろん，洋書も。まだ英語力も十分についていなかったので，当初は，一つの論文や専門書を逐語訳で，全訳していましたね。かたや，組織論の素養を身につけるために，経営学とか，組織論関係の和書も読んでいったという感じですね。でも，面白かったです。だから，よく学生さんには言うんですけど，テーマは，面白いテーマを選びんさいねって。わくわくどきどきするようなものをね。そういうのを選ぶと，時間を忘れて研究に取り組めますからね。でないと，長続きはしないですよね。

Y：当時の，ゼミでの指導の雰囲気というのは，どんな感じでしたか。

K：えっと，主に名和先生の指導を受けたわけですが，僕らの時は，名和先生は，附属幼稚園長をされていたこともあって，あまり細かな指導はされなかったと思いますね。でも，先輩たちの時代は，指導の状況は違っていたのではないでしょうか。ただ，僕の場合は，それが良かった。もし，当時，厳格な細かな指導を受けていたら，指導のペースについていけず，途中で脱落していたと思いますね。当時，試行錯誤を繰り返しながら，ゆっくりと自分のペースで力を蓄えていく充電期間が必要だったからです。だから，学生さんを指導する時，よく思うんですけど，やっぱり人をみて指導せんといかんなぁと。学生さんの

興味・関心も，実力のレベルもそれぞれ違いますからね。自由に，自分のペースで研究できたのは幸いしたと思います。
Ｓ：自由にさせてくださったということですけど，特研で全然発表しないわけではないですよね。
Ｋ：それはもちろんです。名和先生は，当時，細かな指導はされなかったけど，木を見て森を見ずじゃいけないよ，ということはよく言われていましたね。だから，先ずは，大きな方向性を間違わないこと，物事の本質を押えることが大切だと。だから，特研での発表がありますよね。最初の４，５分で，もうダメ出しを，いや４，５分じゃなくて，“はじめに”を読みますよね，そこでもう，だんだんと先生の足の膝の揺れが激しくなってきます。で，こちらは発表してても，見えるんですよね，膝の揺れがね。で，だんだんと大きくなって，「あ，こりゃもうだめだ」って思っちゃうんですよね。ようするに，最初，報告の方向性や論点，枠組を聞いて，もうだめだなって思ったら，もう「いい」って言って，そこで終わり，そんなことがよくありましたよね。だから，木ばっかり見ていると，本質を見失っちゃうぞということを教えられました。
Ｓ：でも，発表を最後まで聞いてもらえないと，それ，がっくりしませんか。
Ｋ：もう，がっくり，がっかりですよ（笑）。
Ｓ：すぐに立ち直れましたか？
Ｋ：いやあ，立ち直れたのかなぁ（笑）。ま，立ち直れたから，今があるのかもしれませんけどね（笑）。
Ｋ：でも，実際そうですよね。学生さんの論文を見ても，最初の問題設定を見たら，もう，いけるかいけないか，だいたい分かりますからね。
Ｙ：名和先生の反応が良くなかった時の，他の院生からのフォローとか，先輩や後輩といろいろ話たりとか，そういうのは。
Ｋ：ありましたよね。特研で落ち込んだ時には，先輩から助言や慰めがあったり。僕が下宿してたのは，仁保新町だったので，近くに住んでいたＫ君やＭ君とは，しょっちゅう，一緒に近くの飲み屋さんに出かけました。流川方面にも自転車で繰り出すこともありましたよ。おそらく飲みでストレスを発散していたのかもしれませんね（笑）。
Ｙ：かなり頻繁に流川に？

K：頻繁にというより，学会発表の原稿を書き上げた時とか，特研での発表が終わった時など，研究室の活動の節目で，研究室の仲間全員で，流川方面に飲みに行ったこともありましたね。楽しかったです。
Y：飲みながらどんなことを話されましたか。
K：ま，いろいろ，男が集まれば（笑）定番の話題もありますが，もちろん研究のことや将来のことなどもよく話しました。
Y：他の研究室の同級生，後輩，先輩とかはどうだったでしょうか。
K：えっとねぇ，僕の場合，ま，みなさんの場合もそうでしょうけど，それぞれ忙しいですからね，どちらかというと，研究室内部での繋がりの方が多かったと思いますね。他の研究室ということになると，授業での繋がりですよね。一緒にゼミに出る友達と，下宿で次の時間の宿題を片付けるとか，ゼミ合宿での交流とか，そんな感じですかね。同学年はけっこう仲が良かったと思います。同学年で下宿に集まってコンパもしましたしね。あぁ，それから，昼休み時間になったら，千田町の運動場で，研究室の垣根を越えて，みんなでしょっちゅうソフトボールをやってましたね。
Y：なるほど，研究室の垣根を越えてソフトボール。
K：そうですね。
Y：ソフトボールは，だいたいみなさん参加されたような。
K：そうですね，あれ，伝統なんですかね，どうなんでしょうね。
古賀一博（以下G）：昔は研究室ごとにチーム組んでやってたよね。
K：そういえば，経営出身のY先生も昔ソフトボールをよくやっていたとおしゃっていましたね。
Y：男女混合チームなんですか。
K：女性はどうでしょう？　主に男性でしょうけど，女性も入っていたかもわからない。
G：まあ，もともとが女性はあまりいなかったからね。入っていても目立たないかも。
K：当時，今から比べると交流はわりとあった方かもわかりませんね。だから仲がいいというか，いい雰囲気だと思いますよ。今は，学科行事としてやっているのかなぁ。

Ｙ：去年，大塚先生の話を聞いても，他の研究室の人たちとの繋がりはかなり強くて，むしろ，今よりも強かったと。
Ｋ：だと思いますね。それから，当時は各研究室に助手がいたんですが，あの助手の仕事って神経を使うものですから，助手会の結束は固いんですよね。うまく仕事を片付けようと，みんなで助け合ってやっていたと思います。
Ｙ：ちょっと話を戻しますけど，ドクターにあがるときに，名和先生からドクターに上がらないかと言われたという話されてましたけど，先生自身がドクターに上がると決められたのはいつごろなんですか。
Ｋ：Ｍ２の９月かその前かな？
Ｓ：就活というか，採用試験は受けられなかったんですか。
Ｋ：あ，そうか…そうするとＭ２ぐらいか，でも，マスターで教員採用試験は受けてないですよね，だから，おそらく，Ｍ２の最初の頃には考えていたのかなぁ，ちょっと記憶が曖昧ですけどね。
Ｓ：大学院の時は，アルバイト，自動車学校のアルバイトは，もうなさってなかった（笑）。
Ｋ：やってなかったです。家庭教師と仕送りで，だいたい生活費を賄っていました。
Ｙ：Ｍ２の最初の時は，先ほど充電期間が必要だったとおっしゃいましたけど，もう，研究が面白い，みたいな感じになられてたんですかね？
Ｋ：ま，基本的には，みんなそうでしょうけど，修士論文を書き終えるまでは，たいへんだろうと思います。他の人は少しは余裕があったでしょうけれども。僕の場合は，学問的基盤がないうえに，しかも，新しいことをやろうとしていましたからね。吸収していくのに必死でしたし，忙しかったです。それから授業もありますしね。でも，Ｍ２に入る頃には少しずつ手応えと面白さを感じ始めていたように思います。
Ｙ：ドクターに入って，なにか，変わったことはありますか。
Ｋ：相変わらず，自由にやらせてもらいました。初めて，中央の学会誌に論文を掲載するなど，研究は順調に進んでいたと思います。それで，２年後に助手となり，その時，僕は物品係をやらせてもらったんです。物品係というのは，学科の会計と物品管理をするもので，学科の予算を組み，それを管理，実施し

たり，購入物品を各研究室に届ける裏方の仕事なんです。そうすると，どこの研究室がどれだけいま予算を使っているかというのが分かるんですね。ある時，うちの研究室が，あんまり使ってなかったんです。12月近くなっても，まだかなり余っていたんですね。そのことを，名和先生にお話したら，じゃ，任せるから，必要な本を買ってこいと言われて，本通りの丸善で，本棚からどんどん本を籠に入れたのを記憶しています。一度に80万円近くの大量の買物したのは初めてでした。当時，実験系の研究室予算は，教授，助教授を含めて250～300万円程度あったと思います。

Ｇ：先生，助手の頃，名和先生は附属幼稚園園長をされてなかったですかね？

Ｋ：そうでしたね。だから，指導を受けるのがなかなか難しかった。

Ｇ：電車通りを挟んで，向こう側の附属幼稚園の方へ行かんにゃいかんかったよね。

Ｋ：おそらく，あの当時の大学教授というのが，一番よかっただろうと思います。

Ｓ：予算もたっぷりあったし。

Ｋ：予算があって，権威があって，時間もあって。よき時代だったんじゃないでしょうか。

Ｙ：助手になられる時は，名和先生から何かお話があったんですか。

Ｋ：んー，記憶は定かではないですけども，先ほど言ったように，先輩たちもほとんど就職され，自分が最上級生にもなったので，Ｄ２を終えた段階で，研究室内の仕事を行う必要上から助手になったのだと思います。

Ｙ：もう，自然な流れというか。

Ｋ：そうですね，特に，理由はなかったと思いますね。

Ｙ：助手になって変わったことというのは。

Ｋ：やっぱり，仕事が多くてたいへんでしたよね。だから，自分の研究は，ちょっとストップしていたんじゃないでしょうか。ま，論文を１本ぐらいは書いていたかもしれませんが。仕事内容といったら，先ほどお話ししたように，講座予算の原案を作成することと，そして，１階の会計係に物品が来ますよね，その物品を８研究に届けることですよね。どこの研究室が，ノートやファイルを何冊買ったかということまで，こと細かに帳簿に記録し，管理，執行していまし

た。今も，当時の予算書がありますよ。
Ｙ：講座事務室の高橋さんの仕事のようなものを，助手がやっていた感じですか。
Ｋ：おそらく，それに近いものをやっていたと思います。出張・旅費関係以外の仕事は除いてね。だから，助手を終えて茨城大学に赴任するとき，新幹線の中から，講座の予算・物品管理のことで連絡をとるほど，ぎりぎりまで仕事をやってました。
Ｓ：他の助手の方はどんな仕事を割り振られていたんですか。
Ｋ：えっと，詳しくは憶えてないですけども，他の助手も，中四とか，今と同じような仕事があったんじゃないですかね，それを僕以外の助手で分担ですよね。
Ｓ：均等に？　やっぱり他の助手の方もお忙しかったんですか。
Ｋ：はい，均等に。そうだと思います。中国四国教育学会やその他の仕事以外に，院生指導など，研究室内の仕事もあるんですよ。当時は，教育学研究科には，教育フィールドワークの一種で，教育行政実地研究というのがありましたよね。この授業科目は，教育行政学専攻の院生と学部４年生が，教育委員会や学校，裁判所，刑務所などの諸施設を訪れて，実際的な見聞を広めるというものでした。僕も，この時，教育委員会との交渉や関係文書の作成や学生の引率等にも一部係わりましよ。今でもそうですが，当時も助手は，学科行事関係のことで対外的な交渉や公的な文書作成にも携わることが多かったですね。この面で，挨拶の仕方も含めて社会人としてのトレーニングを積んだと思います。広島大学の助手をやっていれば，どこに行っても通用するよ，って言われていました。
Ｙ：助手時代，一番たいへんだったことってなにかありますか。
Ｋ：やっぱり，さっきの会計関係の仕事ですね。収支に誤りがあってはいけないし，定期的に講座会議に報告していましたからね。神経を使いましたよ。
Ｙ：そうか，その頃はエクセルもなかったですね。
Ｋ：そうです。予算書も手書きで書いてましたよ。
Ｇ：そうよね，修論も手書きでしたよね，卒論も手書きですよね。
Ｙ：そのあと茨城大に行かれたわけですけど，どのような経緯で茨城大に決

まったんですか。
K：上原先生が，こちらに戻られることになり，そこが空いたので推薦していただいたんだろうと思います。上原先生の前には三好先生がいらっしゃいました。
Y：上原先生と入れ替わりという感じだったんですか。
K：まぁ，そうですね。28歳で茨城大学に赴任しました。
Y：茨城大はどんな雰囲気だったでしょうか。
K：初めて正規に学生さんを受け持ったわけですが，当初は，環境に慣れないのと，講義ノートづくりで忙しいのとで，少々緊張して過ごしましたね。学科の先生方はとても親切で，色々教えていただき，たいへん助かりました。チューターをした学生さんとは，今でも同窓会などで会っています。思い出深い大学のひとつになっています。
Y：授業は，どんな授業を担当されたんですか。
K：えっと，主なものは学校管理ですね。
Y：学校管理？
K：学校管理は学部共通の必修科目で，２クラスを受け持ちました。それぞれ７，80人くらいの学生がいたと思います。そのほかに西洋教育史と，オムニバス的なもので，教育基礎論があったと思います。
S：助手で行かれて，授業を持たれたんですか。
K：そうですね。講師になる１年半くらいの間は，教授の先生と分担していたかもしれませんが。でも，その後も３科目程度の授業負担だったと思います。だからそういう意味では恵まれていたと思いますね。ただし，しばらく経って，教育実習の実務担当をやりました。あれがたいへんでした。県下の協力校が，小，中学校を含めて120～130校くらいあって，協力校実習をやっていました。その運営の実務担当です。どこの学校に社会科の実習生を何人，音楽科の実習生を何人配当するというのを決めるわけですよね。４月末か，５月でしたかね，配当会議があるわけですよ。その時に，県下の小，中学校の校長先生方が，大学に集まられて，実習生の配当計画を最終決定するわけです。その配当が一つでもずれると，玉突きになっちゃうんです。配当の変更が増えるほど，配当がいっそう困難になるので，予め入念に調整をしておかないといけないんですね。こ

れが一番たいへんでしたかね。
Ｙ：その頃は，直接，実習校に行って指導するということは？
Ｋ：あります。でも，指導と言っても，教科の先生方は専門の立場から細かな指導をされますが，教育学科の中では，教育方法の先生は別として，大所高所からの一般的な指導になったのではないでしょうか。僕の場合はそうでしたね。実習校への最初と最後の挨拶，学生の実習後の簡単なコメント，そして不祥事を起こさぬよう実習生への生活指導などでしたね。茨城の面白いところは，他県と違って，大学と教育委員会と県教組は仲が良く，協力的でしたね。県下の現職教員の研修のために，この三者が主催者となって教育研究大会を毎年開いていましたね。そういう意味では，大学と現場との繋がりは強くて，実習もやりやすい方だったと思います。
Ｙ：赴任して１年半後に講師になられていますけど，講師になったら，担当授業は，やっぱりかなり増えたんでしょうか？
Ｋ：あんまり増えなかったと思います。
Ｙ：あんまり増えてないんですか？
Ｋ：授業の数は，先ほど言った３つ程度しか憶えていないんですよ。確かに少なかったはずです。教育学科には，７，８人の教員がいて，幼児教育以外の，教育哲学，教育方法など，各分野の教員が揃っていましたから，その分，授業負担が小さかったんだと思います。ただ，広大に戻る前に，大学院の修士課程が設置され，そのときは，授業科目数は倍以上に増えたと思います。
Ｙ：指導学生はどのくらい？
Ｋ：えっと，教育学科の学生さんは20人くらいだったと思います。それを７，８人でみてましたから，卒論指導の学生は平均２，３人程度でしたね。チューターは，２回ほどやっています。
Ｙ：茨城大で教員になって，一番苦労したことはありますか？
Ｋ：先ほど言ったように実習が一番たいへんでしたね。そうですね，それともう一つ，敢えてあげれば，地方の大学って，いろんな学閥がありますよね。そうすると，学閥などによるグループができやすい。その中での人間関係は，こちらと比べると難しいものがあります。だから，自分の仕事，教育研究以外のところで，かなり苦労するという面があったように思います。こちらに戻って，

そういう気苦労は，基本的になかったですよね。
Ｓ：教授会はどうでしたか。審議時間は長い？
Ｋ：そうですね，教授会での審議時間は，長かったと思います。教授会も，委員会も，良くいえば厳格で，活発でしたね。採用・昇任人事の時には，業績を一定期間みんなが集まるところに閲覧できるようになっているんですね。みんなそれを見ている。教授会で，選考委員長が質問に答えられないと，審議が紛糾しますね。ですから，選考委員長は本人以上に業績について勉強していた。当時の選考委員長はたいへんだったと思いますよ。
　入試委員会の時もそうですね。センター試験が導入される時，大学としてどんな試験問題を作るかが検討されました。客観性を重視するか，客観性は多少損なわれても論述問題にし，共通テストでは測れない問題にすべきか。これをめぐって，会議はいつも延々と続きました。会議は１週間に１回程度のペースで開かれ，１年間に50回以上の会議を重ねました。事務官は会議ごとに詳細な議事録をとりましたよ。サンプルの試験問題を作っては破棄し，また作る。ある時は，客観性を重視するあまり，知能検査に近い試験問題が出てきました。これにはちょっとびっくりしましたけどね。最後は，委員会として模範解答例を添えて入試問題のサンプルを教授会に提出し，教授会構成員にも問題を解いてもらいました。
Ｓ：大学によって雰囲気が違う。
Ｋ：違いますね。
Ｙ：もうあまり時間もなくなってきましたので，先に進めますけども昭和60年にアメリカに行かれたんですよね。どうしてアメリカに行こうと思われたんですか。
Ｋ：自分がアメリカ教育行政学の研究をしていましたから，文献収集などをしたいなという気持ちがあって。当時，たまたま，文部省に若手研究員派遣プログラムという制度が創設され，これに応募し，希望が叶ったということです。全国の大学のいろんな学部から応募者があったようで，あまり期待はしていなかったのですが，運よく…
Ｙ：留学先をコロンビア大に決められたのは？
Ｋ：僕は，教育行政の理論的研究をしていますが，この分野では，コロンビア

大学のティーチャーズカレッジが有名なんですよね。それで，この大学の教育行政を担当しているイアニ教授に連絡をとり，受け入れを許可してもらったんです。実際に行ってみたら，教育行政に関する古い文献から新しいのまで結構たくさんありましたね。たいへんよかったと思います。

Ｙ：研究領域としては，文化人類学的な。

Ｋ：当初，僕は，イアニ教授は，純粋な教育学から教育行政をアプローチしている先生だと思っていたんです。それが全然違う。当初，先生の学問的背景を十分に知っていなかったんですね。で，直接お会いして，お話を聞いたら，もともと人類学がご専門で，マフィアの研究をされていたようですね。最終講義の時にお話したように，僕がやっていたのは，実証主義的な研究方法をとるアメリカの教育行政学の研究ですよね。しかも理論を重視し，論理実証主義の影響を受けた教育行政学ですから，もうガチガチの科学主義に基づくものですよね。で，そういう考え方に立つアメリカの教育行政学の発展過程を跡づけようとしていたわけです。ところが，僕が行ったのは86年頃ですけど，もう74年頃には，そういう理論を重視するような厳密な科学主義による教育行政学研究というのは厳しく批判されていたんですよね。批判されて10年近くは経っていたわけです。ですから，留学した86年というのは，前の実証主義的な研究方法論が批判され，一定のまとまった研究物も出てきた時期ですね。だから，イアニ教授からみれば，あんなのは研究ではない，というような，ま，そんな雰囲気だったですね。その時に，初めてこういう研究方法論も教育行政学にはあるんだと気づいたんですね。当初は戸惑いましたけど，そのあと，新しい研究方法論に関する文献を集め始めました。これを機に，新しい方法論の視点を踏まえて，アメリカ教育行政学の発展過程の見直しを行いました。その成果が学位論文になりました。

Ｙ：じゃあ，アメリカでの，その経験は，すごくその後の研究に…

Ｋ：そうですね。私にとってこの経験は大きいですね。若い時に留学するというのは，いいですよね。留学期間はたかだか10ヶ月なんですよね。その短期間の留学生活で何を得るかというのは難しいですね。直接の成果は上がらんわけですけど，そういう新しいアイデアを得るだけでも意義があると思いました。あ，こういう，新しい研究方法論が注目されているんだということを知っただ

けでもね。そのあと，資料を日本に持ち帰って研究をまとめるのに10年近くかかりました。広大にもどって，しばらくして「教育フィールドワーク演習」を開講しましたが，この演習ではイアニ教授のやり方をちょっと取り入れているんですよ。受講学生の観察力を養うために，ティーチャーズカレッジのレストランでした同じ方法で，広大の生協食堂でも，最初１人観察し，次に２人観察し，じょじょに観察対象を，３人，４人，５人と増やしていくことをしましたね。

Ｙ：広島大に来られた経緯についてなにか。

Ｋ：えっと，これは，詳しくは憶えていませんが，上原先生から，研究室人事の公募があるので，どうなるかわからんが応募してみてはどうかという話をいただいたと思います。それからですね。僕はもう向こうで，１，２年前に家を購入していました。子育ての時期でもあり，向こうでずっと住もうと思っていました。近くに大きな公園もあり，住むのにとても良い環境でした。で，とても光栄な話だけども，どうしょうかなと少し悩みました。向こうでのんびりと暮らしたいなという気持ちもありましたし，自信もありませんでしたしね。でも，最後は，夫婦２人とも郷里が広島ということもあって，それが決め手になったと思います。

Ｙ：帰ってきて，広大はどんな感じだったですか？

Ｋ：（笑）あの，最初帰ってきて，今でも思い出しますけど，常磐線の電車に乗って，車窓を流れる風景を見ながら，いやあ，これから帰るんだけども，率直にいって，有名な教授の先生方がいらっしゃる中でやっていけるかなぁというのが実感でしたね。自分の研究のこと，院生指導のこと，将来のことなどを考えると，不安でしたね。当時は定年が63歳で，40歳の時に帰りましたから，23年間どういうふうに過ごそうかなって，マジで思いました。でも，人間というのは適応できる動物というか，月日を経るうちに，周囲の先生方にも助けられながら，広大での教員生活にじょじょに慣れてきましたね。僕にとっては，複雑な人間関係に煩わされることなく，仕事に集中できたのはありがたいことだと思いました。それからもう一つは，やっぱり講座会議での議論，例えば学位論文を出す時の，先生方の議論は，それぞれの分野の専門家が話しますから，当時の，若輩の僕には，とても面白く，勉強にもなりましたね。議論の時の緊張

感ってすごかったですよ。やっぱり，博士課程をもつ大学って，こういうところがすごいよね，と思ったものです。
Ｙ：広大で担当された授業は，最初は何をされたんですか？
Ｋ：えっと，最初は，上原先生の学部向けの授業である教育行政学を，後半辺りからその一部を担当させていただいたかな。
Ｙ：ふたりで行政学の講義をやる，という感じだったんですか？
Ｋ：そうですね，当初はそうだったと思います。
Ｙ：茨城大の学生と比べて広島大の学生はどんな雰囲気でしたか。
Ｋ：やっぱり知的トレーニングがしっかりされてますよね。それから教育学についても，基礎的知識を持っているし，学習意欲も旺盛だなと感じました。
Ｓ：出られる時には千田町の方から出られて，戻って来られた時には，もう教育学部が移転した後の，東広島に来られて，そういう大学がある街の雰囲気も当然違うし，建物，施設も当然違うっていうのがあるんですけども，それも含めて出られた時の，大学，この教育学講座の先生方の雰囲気，学生の雰囲気と，戻って来られてからの学生，先生方の雰囲気というのは？
Ｋ：難しい質問ですね，違いがあったかなぁ。
Ｓ：そんなに大きく違いを感じられませんでしたか。
Ｋ：うーん，旧千田町時代の教授陣は，重厚な布陣で，当時，それぞれの分野で全国的に活躍されていましたから，すごいなあと思って見ていましたけどね。こちらに戻った時も，広島大学の教授陣の存在感を強く感じましたけど，年齢的により近いぶん，親近感をもって見ていましたかね。どう表現していいのかなぁ。
Ｓ：その，千田町にいらっしゃる，先生が学生でいらっしゃる頃っていうのは，ソフトボールをしたりして，研究室の壁を越えた繋がりがあって，戻られた時には…
Ｋ：あぁ，それはやっぱり少なくなったのかなぁ。それから，研究室内の学生さんを見ると，一緒になって何かをするというのがあまりないのかなぁと思いますね。学生さん，それぞれ今は忙しいから。でも，どうなんでしょう。研究室の壁を越えた，学生同士の交流は，学科行事を通してフォーマルな形で行われているのかなぁ。今でも，学生同士，特に同学年の学生の仲はいいと思いま

すけどね。これは，伝統ですかね。
Ｙ：学位を取られたのは，こちら広島大に戻られてからですよね。
Ｋ：はい，そうです。
Ｙ：こちらで，仕事をされながら書かれたんですか。
Ｋ：そうですね。帰って３年目くらいに書いたと思うんですけど，今でも，あの時期よく取ったなと思います（笑）。
Ｙ：たいへんだったんじゃないかと思います。
Ｋ：いやぁ，それはね。戻って３年後に上原先生がご退官されるでしょ。退官事業とか，その他出版事業もあり，多忙な時期でしたね。上原先生がご退官になる年の，２月に取らせていただきました。
Ｙ：大学でのお仕事については。一番大きなお仕事というのは附属幼稚園の園長をされたことですか？
Ｋ：そうですね。幼稚園長を務めたというのが大きいですかね。就任後，しばらくして自然と一体化した幼稚園づくりをしようというので，先生方と一緒になって森の幼稚園構想の実現に取り組みましたね。裏山の，四季折々の美しい自然を眺めながら，子どもたちと一緒に遊んだのも，今では楽しい思い出の一つとなっています。あと，学会の仕事がありますよね。で，僕はどちらかというと，共同研究は苦手なんですよ。もちろん，共同研究には共同研究の良さがあるんですけど，個人的には性に合わない。なぜって，なかなか自分の思い通りにはできないでしょ（笑）。組織として動かなければいけないし，調整も必要ですよね。そういうのが，ちょっと苦手ですね。でも，結局，最初は，46歳ぐらいの時に，日本教育経営学会の研究推進委員長をやり，あと，56歳の時，日本教育行政学会の研究推進委員長をしました。皮肉にも，研究推進委員長という立場上，共同研究を組まなければならなくなりました。でも，共同研究を進める過程で，自分にはない発想や気づきなどがあり，それはそれで，たいへん勉強になりましたね。
Ｓ：共同研究は，何人くらいで，どんなふうに進めて…
Ｋ：経営学会の場合は，研究推進委員を中心に会員23人くらいで研究組織を立ち上げました。研究テーマは「地方分権下における自律的学校経営の構築に関する総合的研究」で，科学研究費の交付を受けました。大所帯でしたので，調

整，意思統一，そして事務処理等でたいへんでしたね。私自身も，企画からデータ処理の段階まで深く関わりましたが，若手会員の皆さんもとても積極的に動いてもらい，とても助かりましたね。その成果は一書に纏め，出版しました。行政学会の時も，研究推進委員を中心に13人程度で研究組織を構成し，教育委員会制度と教育機会格差の二つの研究を行い，これも，それぞれ成果を本にして出版しました。

Ｓ：23人は多いですね。

Ｋ：確かに多かったですね。

Ｓ：で，教育行政学会の会長をなさったのはおいくつくらいの時ですか？　お若い…

Ｋ：59歳ですかね。

Ｓ：会長は結局何年されたんですか。

Ｋ：３年です。

Ｓ：任期が３年。

Ｋ：そうです。一期３年ですね。

Ｓ：このお仕事は，なにか印象に残っておられることってありますか。

Ｋ：うーん，印象というか，やっぱり，学会全体の立場から物事をみるようになりましたね。なんでもそうですけども，その立場にならないと見えない風景というものがありますよね。会長という立場になって，学会全体の動きがよく見えるようになり，また関心をもって見ざるを得ないし，見ようともした。とくに，日本の学術政策がどういう方向に動いているのかというのは，やっぱり，気になりましたね。そうしたなかで，これからの研究というのは，大型の，学際的な研究を推進しようとしていること，また，若手研究者の育成が非常に重要になってきていること，それから，外国の研究者を交えた研究の推進も全体として強く求められていること，などを痛感しましたね。いろいろ勉強させてもらいました。

Ｓ：そういうことを踏まえて，会長として，なにか新しい取り組みというのはなさったんですか。

Ｋ：やっぱり，学会として，どういうんだろう，日本の学術政策は，そういう方向に動いていますから，中央の学術団体から，各学会にも，その要望が来る

わけですよね。だから，例えば何でしたっけ，正確な名前を忘れましたけども，若手研究員ネットワークみたいなものを立ち上げたりしたこともありましたね。それから，学会として，法学者や経済学者など，他分野の研究者を呼び，課題研究やシンポジウムを組むこともやりました。それからもう一つは，さっき言わなかったですけど，最も大事だなと思ったのは，研究と実践を結びつけるということですね，それで，市町村教育長との交流を促進しようと，特別予算をつけました。あれは，何でしたっけ？

Ｇ：会長裁量経費。

Ｋ：そう，会長裁量経費を学会予算に計上し，毎年，市町村教育長との共同企画で，地域の教育行政課題を検討し，交流を深めるようにしました。

Ｓ：３年の間に盛りだくさんでしたね，いろいろ。

Ｋ：いえ，今までの活動の延長線上で，整理し，重点化したということですかね。

Ｓ：そのあたりも，ちょっと本当は，若手ネットワークというのも気になるんですけども，もう時間がありませんので，最後に，この教育学講座の教員，あるいは学生に伝えたいことは？

Ｋ：難しい質問ですね。学生さんについては，やっぱり方法論をしっかり身につけてほしいと思いますね。講座としても，今，カリキュラムに設けている，質的研究方法や量的研究方法，そして外書講読などの授業科目は，これからも継続し，さらには充実させてもらいたいと思いますね。それから，これからの社会の動きをみると，多面的に物事をみる眼とか，歴史，伝統文化の素養は学生さんにはきちんと身につけて欲しいと思います。

教育学講座のことに関しては，これからどうなんでしょうかね。教育学講座の改革というのは，講座内だけでの改革というのは難しくなってきたんじゃないかなと思います。というのは，講座の教員数が少なくなりつつありますよね。こうした状況下で，特色ある講座を独自につくろうとしても，制約条件が大きくて，なかなか出来にくくなってきていると思います。そういうことを考えると，先ずは，教育学講座では何をしたいのか，どこに特色を持たせるのかを決めて，研究科全体の改革構想の中で進めていくしかないのではないかと思います。一昔前であれば，講座のスケールメリットも生かせたと思いますが…

Ｓ：ちょっと話が大きくなりますけど，そうしますと，先生が25年間ここにいらっしゃって，教育学研究科が，将来的にこんな風に，こんな方向に今後進んでほしいというような思いは何でしょうか。
Ｋ：それは，先ずは，やっぱり研究大学院としてどう充実させるかですかね。どういうのか，基礎研究を充実させ，新しい教育情報や知見をどんどん発信していくことが重要なんでしょうね。他方で，その新しい教育情報をどう具体的に活用していくか，その応用的，実践的研究や活動も強く求められています。この二つの要請を，講座内あるいは講座間でどう案配，調整していくか，これまでもそうでしたが，今も，これで，研究科は悩んでいると思います。僕にも妙案はありません。ただ，個人的には，手前味噌になりますが，教育長，指導主事，学校管理者，指導的教員等の研修ないし養成プログラムを開発してほしいという願望はありますが…
Ｓ：最後に，じゃあ私からちょっと，先生にとって教育行政学の魅力というのは。
Ｋ：教育行政というのは，簡単に言えば，教育の目的を達成するための条件整備活動なんですね。その条件整備をするために，政策をつくって，それを実施して，効果があるかを検証しているんですね。ですので，政策は，行政にとって命なんです。ところが，この政策は，教育問題を解決するための処方箋みたいなもので，理論と実践をつなぐ架け橋的な役割を果たしています。政策をつくるためは，教育学で得た新しい情報や，知見を活用していくわけですから。そういう意味で，教育行政は，研究や理論を実践に結び付けていく活動しているわけですから，非常に興味深い，面白い領域だと思います。しかも，教育行政は，子どもの教育に直接的な影響は与えないにしても，その条件整備活動を通して，間接的にではあっても，子どもの教育に大きな影響を及ぼしていく，その意味でも，教育行政の研究は重要だと思っています。
Ｓ：ありがとうございました
Ｙ：はい，では，だいぶ長くなってしまいましたが，今日はありがとうございました。貴重なお話をいただけたと思います。